

連載
講座

第23回

災害用食料の運送に知恵・松平定信

作家 童門冬二

天明年間（1781）は日本全国で飢饉が起こった。天明2（1781）～3年にかけては、関東地方から東北地方はとくにひどかった。それは浅間山が爆発噴火したからである。灰の降り方が凄まじく、東北・関東・中部地方にまで降り注ぎ、農作物を全部潰してしまった。

そんなときに、御三卿の一田安家に生まれた定信は、突然奥羽の松平家の養子に迎えられた。二十六歳である。これは、幕府首脳部の政略によるものであって、定信があまりにも賢いので、「次の将軍の有力候補者になる」といわれていた。それを警戒した老中筆頭（総理大臣）の田沼意次（たぬま・おきつぐ）が、一橋家の当主と組んで、定信を白河藩主に押しこんでしまったのだ。これで定信の将軍になる目は潰れた。白河城の重役たちが気の毒がって、「とんでもないときに殿様におなりになりましたな」と慰めた。ところが定信は笑ってこう応じた。

「いや、わたしはまだ若い。二十六歳だ。おそらく天が、わたしを試すためにこの災害をくださったのだろう」。これをきいて重役たちは思わず顔を見あわせた。それは、

（よい殿様がきてくださった）と安堵したのである。定信はいままでたくさんの本を読んできた。思想や哲学の本ばかりではない。実用書も読んだ。したがって災害については多少の予備知識を持っていた。

「そういうときに、藩主はなにをすればよいか」ということも自分なりに考えてきた。定信はこのとき重役たちに指示したのは、

「藩民のための食料の確保」であった。しかし江戸の米市場はすでに関東地方の難民が次々と買いつけているので、ほとんど倉庫は空だ。そこで定信は重役に、

「大坂にいった米を買いつけて欲しい」と命じた。すぐ重役のひとりが大坂へ旅発っていった。しかしすぐには間に合わない。たまたま白河藩は越後（新潟県）の柏崎に飛び地を持っている。四万石の石高だ。これをきいた定信は、

「柏崎から白河へ米を送らせよ」と命じた。報告によれば柏崎のほうはそれほど被害がひどくないときいたからだ。が、柏崎は遠い。重役が心配した。

「柏崎から白河まで米を運んでくるのには、相当な日数がかかります。それに運搬の費用もバカになりません」

「なるほど」

定信も考えこんだ。飛び地から米を運ぼうという案は決して悪いことではない。が、地理的なことをまったく考えていなかった。そして米の調達にばかり頭が働いて、運搬のことを考えなかったのである。定信は重役と相談した。重役たちは、

・ 柏崎から白河までの距離が遠いだけでなく、こちらに近づくにしがって勾配による被害状

況が大きくなるので、道も寸断されていること

- ・ したがって、柏崎から出発した米の運搬も途中からはかなり白河までくるのに難儀すること
- ・ それを突破するには、運搬の人員を倍以上にし、賃金も相当思い切った額を出さなければ運搬者が承知しないこと

などを報告した。

定信はつくづくと自分が非現実的な次元に生きてきたことを知った。本の中からいろいろなことをおぼえたつもりだが、結局はすべて机上の議論だった。重役たちがこもごも報告するような、現実的に即したナマの仕事の難しさを知らなかったのである。しかしだからといって定信はへこまなかった。それはかれが重役たちにいったように、「これは若い自分に対する天の試練だ」

と思っていたから、なんとかして知恵を働かせ、この危機を乗り切らなければ天の試練に答えることができない、と思ったからである。そう考えたときに、定信の頭に閃くものがあった。それは、「柏崎と白河の間の藩に、米の立て替えを頼む」ということである。どこがよいか、と思案した。そしてすぐ。

「会津藩だ」と思った。会津藩主は保科正之が藩祖だが正之は三代将軍徳川家光の実弟なので、やがて保科家は松平家と名を変えた。定信の家も、第八代将軍吉宗の息子の家なので、定信は吉宗の

孫に当たる。したがって会津藩とは縁が深い。よし、と定信は決意した。直接会津にいった、藩主の松平氏にこのことを頼んだ。会津藩主は快く承知してくれた。会津から車に載せた米俵がどんどん白河へ運ばれてきた。重役たちが眼をみはった。定信の勇断におどろいたのである。しかしよろこんだ。こうすれば、柏崎から運んでくるのとは段違いに運賃が安くてすむ。それに運ぶ労働者たちの賃金もそれほど張らない。

「さすが、うちの殿様は一時は次期将軍だといわれるほどの賢い頭脳をお持ちだ」

と褒め合った。実をいえば、定信はこの案を、重役の中でも普段から“昼行灯”と呼ばれていた、高齢者の重役がそっと進言したことなのである。定信は高齢者の重役に感謝した。米が届き、どんどん被災者に配られるのを城の櫓からみながら、定信はしみじみとその高齢者重役に礼をいった。松平定信は、日本で最初に“老人の日”を設けた大名だといわれる。そのきっかけはこのときの災害用食料を、飛び地の柏崎からではなく、中間にある会津藩から借用するというような知恵を、高齢者が持っていたからだ。

「毎月一回、高齢者を城に呼んで、ご馳走をしながらいろいろ藩政に対する意見をきこう」と思い立ったのである。